
Another World

紫愚真

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

A n o t h e r W o r l d

【Nコード】

N 4 5 0 5 X

【作者名】

紫愚真

【あらすじ】

激しいいじめに悩まされていたゲーム好きの少年「エリク」は、我慢できずに反抗してしまう。しかし溢れ出した怒りは止まらず、ついに傷害未遂にまで発展してしまう。教師に怒られ、明日のことを思い絶望で一杯になった少年の元へ、見知らぬ人物から謎の封筒が届いた。

そのなかにあるものとは……。

第1話 少年と通信簿とカッター

「あーあ。ラスボス倒しちゃった。クソ雑魚じゃん。」

カーテンを閉め切って電気を消し、室内に光源が無ければ何も見えない暗い部屋で、

少年―エリクが小さくつぶやいた。

彼はゲームが大好きだ。暇があればゲームをするし、ゲームをしない日はない。

しかしゲームをクリアすると、その思いは冷める。

なぜか―現実に戻されてしまうからだ。彼は学校では友達はおらず、家では勉強のことや反抗的な態度のことで、親に叱られてばかり。

泣いたことも、怒ったことも、今までに数えきれないくらいあった。笑ったことは・・・おそらくほとんどない。

そんな虚しい日々を送っている彼にとって、唯一のオアシスが「ゲーム」なのだ。

彼は現実から逃げたいから、現実から目を背けたいから、「ゲーム」をする。

エリクを一言で言えば、「クズ」だ。

放課後ほとんど人がいない教室で、4、5人の見るからに性格の悪そうな男子が、細く小さい男の子をとり囲んでいた。

「通信簿見せるよー!!」

「ええ・・・やだよ・・・」

強引に通信簿を奪おうとする男子から、エリクは必死に通信簿を守ろうと抵抗した。

「ああ？俺達に口答えできると思ってたのかよ？クズのくせによ！」

「マイクの言うとおりだぜ。お前はクズだ！」

リーダー格と思われる長身のマイクが、仲間たちを煽り立てた。

「クズ！」

「クズ！！」

「クズ！！！」

「クズ！！！！！」

「・・・って・・・うなっ・・・！」

静かな教室に響き渡る「クズ」という音を、妙に抑揚の激しい、だが小さい音が遮った。

「何言ってるのか聞こえねえよ？もっと大きな声出せねえのか？クズ」

「クズって言うなあっ！！！！！！！」

エリクのか細い体からは想像もできないような、大きくて激しい声が発せられた。

「僕のことをクズって言うなっ！僕が一体何をしたって言うんだ！？ただ普通に生活したいだけなんだ。君たちのせいで、僕の人生はめちゃくちゃなんだよ！」

何年も溜まってきた感情が、一気に溢れ出した。だがその感情は、溢れ出しすぎてしまった。

少年は筆箱からおもむろにカッターを取り出す。

そして自分でも訳が分からないまま、それをマイクたちに向かって振り回した。

「っあ！あつぶねー！コイツに殺されるぞお！？」

「ご、ごめん！悪かった。謝るから！」

普段あれだけ大きい態度をとっていたマイクたちが、別人のように弱腰で謝っている。

だが、それはエリクを余計に怒り狂わした。

今までさんざんいじめてきて、自分の身が危なくなったらこれか。

「もう二度と暴力振るったりしねえよ！！悪口も言わない！もちろんカッターを振り回したことだって黙ってる！だからやめてくれよ！」

「そこまで言うなら。もうやめてしまおう。」

一瞬でもそう思った自分のことも、許せなかった。

彼の顔は赤く染まっていた。怒りと興奮と羞恥心と罪悪感が入り混じった複雑な気持ちによって。

どうすればこの気持ちを抑えられるか。彼には分からなかった。

だが、彼の腕は勝手に動いていた。

「・・・っあ！や、やめてくれえー！ー！」

マイクを教室の端に追いやる。

マイクは壁にもたれかかるように立っていた。

エリクの手に持たれたカッターを凝視しながら震える彼を見て、なぜだかとても心地よくなった。

この気持ちを抑えるにはどうすればいいか。やっと分かった。

心のままに腕を動かし、マイクの腹に向かってカッターを刺そうとした。

だがその行動は、不意に開かれたドアによって遮られた。

座り込み、震えが止まらないマイクの後ろに立っていたのは先生だった。

エリクがマイクに夢中になっている間に、他の誰かが呼んできたのだろう。

先生は冷静にカッターを取り上げ、生徒指導室へとエリクを連れて行った。

先生はエリクのことをキツく叱った。

今までのマイクたちによるイジメを知らなかった先生にとって、今回のことはエリクの一方的な暴力行為に他ならなかった。

（何も知らないくせに・・・。どうして僕が怒られるんだ・・・。）

「今回のことは他の人には言わないが、もし次やったら絶対に少年院送りだからな。」

そう言い残し先生は生徒指導室を去った。

（どうせなら今回少年院に送ってくれたらいいのに。）

先生は他の人には言わないと言っていたが、明日・・・早ければ今日にも、マイクたちが学校中の皆にカッターの件をいう事はもはや当たり前だった。

明日からみんなに軽蔑されるのは決定だ。いや、正確には今までも軽蔑されていたのだが。

マイクたちもどうせいつかはまた虐めてくるだろう。それももっと激しく。今度は自分がカッターを向けられるかも知れない。

どうせそうなるなら、いつそ今自分がマイクを殺してしまおうか。だが、彼にそんな勇氣などなかった。

絶望感でいっぱいになった彼は、とぼとぼと教室に向かった。

教室に入ると、ぐちゃぐちゃに乱れた机やイスを先生が並べていた。

1

一瞬目があい、凄く気まずかった。

どうやらマイクたちは先に帰ったようだ。

自分の机の横には、通信簿が落ちていた。

そもそも自分の成績が悪いのが原因なのだ。

そうじゃなければあんなに必死に通信簿を隠さなかった。

やはり悪いのは自分なんだ。勉強も運動もできない自分が悪いんだ。ならいつそ自殺しようか。

――いや、それだけはダメだ。

今までだって何度も自殺しようと思った。でもそれだけはできなかった。

今まで必死に耐えてきた過去の自分を裏切ることになるから。

人間は皆信用できないが、自分の事だけは信じたかった。

意味のない自問自答を繰り返し、何も考えられなくなった。考えたくなかった。

彼はスクールバッグを背負い、今にも倒れそうなほど気力のない姿

で教室を出た。教室に通信簿を忘れてしまったことに気付いたのは校門を通ってからだ。

（まあ、いつか……。どうせ僕の人生なんて終わったんだ。）
そう思った彼は、学校に戻ることなく家に帰った。

第2話 謎の封筒

家は学校からほど近い。

なのになぜだが凄く遠く感じた。

いつもは走っている道だからだ。

一刻も早く、学校から遠ざかりたいから。家に帰りたいから。早く「ゲーム」をしたいから。

毎日そう思っていた。

なのに今日は走っていない。走ることができない。足がすくみ、前に進むことを躊躇してしまう。

先ほどの出来事で彼の心は完全に閉ざされていた。今にも気がおかしくなってしまうようだ。

どこからか湧き上がる虚無感を抑えようと、深呼吸を繰り返し、なんとか心を落ち着かせようとした。

少しずつ鼓動の早さが正常に戻っていくのが分かる。

最後に大きく息を吐くと、とても落ち着いた。

そうすると彼は、いつも通り家路を急いだ。

走るときに受けるさわやかな風を感じながら、明日のことを考えていた。

明日のこと―周囲の反応のことだ。

マイクたちからカッターのことを聞いた皆は、何を思っただろうか。

今までは何もできない臆病な奴と思われていただろう。反抗してこないのが分かっていたから、余計に虐められた。

その自分がカッターで傷害未遂を起こしたとなれば、誰もが驚くはずだ。

よりもよって、自分のことを一番に虐め、蔑んでいたマイクたちにならばなおさら。

そして、少しだけ自分のことを警戒するかもしれない。

「犯罪者」だとか、「頭が狂った。」などと言われるのは容易に想像できるし、別に恐れるほどのことではない。

警戒されれば、少しは関わってこなくなるかもしれない。

少なくとも、「反抗してこない」というイメージは拭うことができた。

―それだけで十分じゃないか。むしろ自分にとっては好都合だ。

「またあんな事をしたら、いつか僕は虐められなくなるかもしれない。」

彼は無意識のうちに、そうつぶやいていた。

彼は使う道具や行う場所、時間、そして最も大切な「標的」を考えながら、マンションのオートロックを首にぶらさげた力ギで開けた。そしていつものように、彼の住む1202号室のメールボックスを開けた。

そこに入っていたものは一つの封筒だった。

見知らぬ住所と、聞き覚えのない名前が書かれていた。

彼はその「シャーロン・ハック」という名前を、エレベーターに乗りながら必死に思い出そうとした。

エレベーターを降りて、家の玄関を開けても、全く思い出せない。

そもそも知り合いに「ハック」という名字の人間がいた記憶はない。

(まあ・・・いつか・・・)

そう思うと彼は手を洗い、自分の部屋に入った。

封筒に何が入っているか分からないので、彼は部屋に鍵をかけた。

今、家には自分しかおらず、意味のない事なのだが。

ベッドの上に封筒を置き、封筒を勢いよくハサミで切り裂く・・・。

「あ！ゲーム！？えっ！と、あ・あのぜえー・・・う・うお・・・うおーるど？」

そこに入っていたのはゲームソフトだった。「アナザーワールド
Another World」

orld」と書かれている。

封筒には他には何も入っていないかった。パッケージも、説明書もない。

「なんだこのタイトル？聞いたことねえぞ……。」

エリクはパソコンを立ち上げ、「Another World」と検索してみたが、有用な情報は得られなかった。

「自作のゲーム……ってことかな？ちよつとやってみつか。ドラファン？は昨日クリアしちゃったし。」

そうすると彼はそのカセットをゲーム機に差し込んだ。

すると、「カチツ」という音と共に、部屋中をまばゆい光が包んだ。「う、うわあああああ……！！！！！！！！！！！！！！」

第2話 謎の封筒（後書き）

第一話からけっこう経ってしまいました。
すいません！

読者の方から

「主人公は外国人のような名前なのに、Another Worldを読めなかったり、某和製ゲームのようなタイトルを遊んでいるのは少々違和感を感じる。」
という意見を頂きました。

・英語を読めなかったことについて

第1話中盤でも書いた通り主人公は勉強が苦手な設定です。それと、確かに外国人のような名前ですが、「。。。人」とは言っていない。

・某和製ゲームを思わせるタイトルを遊んでいることについて

ドラ。エシリーズやファ。ファンシリーズは外国でも発売されていますし（・・・おそらく）、少々の遊び心のつもりです。

違和感を感じられた方には申し訳ありませんでした（――）

第3話 異世界での対面

今まで見てきた物、会った人、体験した出来事が、走馬灯のように目の前に映し出される。

どれも思い出したくないことばかり。またエリクの心が沈む。

その暗闇の中に、急に光が差し込んだ。

「……………んっ……………う……………うわああ！！！！！！！！」

水をかけられて起こされたように、彼は驚愕の声を発した。

とても長い間眠っていた。目を開けたばかりで視界がぼんやりとしている。

徐々にはつきりとしてゆく視界とは逆に、彼の思考はどんどん曇ってゆく。

「ここは……………どこ？」

目を覚ました場所、そこは見知らぬ草原だった。

見渡す限り一帯に広がる草原。町も山も見当たらない。生えている草は絵の具のように濃い緑、いやビリジアンに染まっていた。上を見上げるとそこには空があった。雲一つない青空。だがなぜか太陽は見当たらない。服をなびかせる穏やかな風も、生暖かく、どこか不気味だった。

— いったいここはどこなのだろうか。

来たことも見たこともない場所に、彼は戸惑っている。

よくある風景のようで、何かが違う。自分の知っている地球とは、どこかが違うと感じた。

すると彼に、徐々にここに来る前の記憶が戻ってきた。

……………自分のもとに、見知らぬ人物から封筒が届いた。
その中に入っていたゲーム、「Another World」を家

でゲーム機に差込み、起動した瞬間。
目を焼くような激しい光が発せられ、まぶしさのあまり目をつぶって伏せてしまった・・・

気づけば見知らぬ場所に一人・・・。

状況が整理できたところで、ますます彼はとまどった。

周囲に出口やワープホールのようなものを探したが、見つかるはずもない。

あのゲームソフトも見当たらなかった。

するとその代わりに、彼の耳に妙な声が聞こえた。

《やあ、エリクくん・・・で、いいのかな？》

どこからか、聞き覚えのない若い青年の声が聞こえる。

「だ、だれだ!？」

焦って辺りを見回すが、やはり何も見当たらない。

いったいどこから発せられている声なのだろうか？

軽く鼻で笑うように、謎の声の主は続ける。

《無駄だよ。ぼくはそこにはいない。》

「じゃ、じゃあどこに居るんですか？あなたは何者なんですか？こ

こはどこなんですか？なんで僕はここにいますか？」

突然聞こえた謎の声、しかも発している人はどこにも見当たらない。

彼は動揺している。

《そう1度に何個も質問をしたって答えるにも答えらんないよ。1つずつ説明してあげる。》

謎の声の主は呆れているようだ。

《僕は今そこにはいないといったね。でも正確には、その世界にはいないんだ。》

「ど、どういことですか!？」

その“世界”には・・・? いったいどういう意味なのだろうか。

もしや今自分が居る場所は地球ではなく、今立っている大地も自分が今まで踏んでいた地とは違うのだろうか。ならこの世界は……。

「じゃあここは……この世界はどこなんですか!？」

《1つずつ……といったはずだよ。僕が最初に答えるべきことはまだ話していない。》

ばつが悪そうにエリクは小さく舌打ちをした。

《僕は今、自分の家に居る。》

予想もしていなかった拍子抜けの回答に、彼は驚いた。

「え？家……ですか？ならなぜあなたの声が聞こえるんですか？」

その質問を無視し、謎の声の主は続けた。

《僕は何者かと聞いたねえ。僕は天使さ。》

「天使って……。僕を馬鹿にしてるんですか？」

《はっはっは!だって君は馬鹿じゃないか!》

見知らぬ人にかかわれ、彼は少し不機嫌になった。

《冗談だよ。少しも君をからかっているつもりはない。僕が天使と
いうのは真実さ。名前はラファエル。以後、お見知りおきを。》

どうやらこの声の主が天使だということは本当のようだ。

「天使の……ラファエルさん……ですか？」

《そう。あとは……。っそうそう、君は今自分が居るその世界がどこかと聞いたよね。》

「はい。」

彼が最も気になっていた答えは、最も信じ難いことだった。

《その世界は……ゲームの中だ。》

第4話 天使の告白

「え!？」

エリクの中に衝撃が走った。

ゲームの中—どこかが自分の居た世界とは違うと思っていたが、まさかゲーム世界の中だったとは……。彼はまだその状況を飲み込めずに居た。

《現実世界とは違う、ゲームの世界。もうひとつのせかい。つまり、

“Another World”だよ。》

“Another World”・・・あのゲームだ。今自分は、あのゲームの中に居るのか。

「そ、そのゲームを起動したら、この世界に来てしまったんですが・・・？」

天使ラファエルは当然のように話した。

《当たり前だよ！僕がそうなるように仕組んだんだからね。》

彼はとても明るい声で、信じられないことを言った。

「仕組んだ・・・って、どうやって？」

《僕は偉大なる天使だよ？転送術ぐらい使えるさ。今回はそれを応用したんだ。何かをきっかけにして、物体を異次元に転送する仕組みを作ったのさ。そしてこの転送のきっかけとなったのが、あのゲームの起動。物体ってのは君のことだね。》

エリクはなおも混乱していた。いったい何のために・・・。

「どうして・・・どうして僕にそんなことを?!？」

《実はこのゲーム、僕が作ったんだ。今、僕の住む天界では趣味としてゲームを作るのが流行っていてね。と言っても、人間界のゲームのようにパソコンを使ってプログラミングしたり、キャラクターデザインを考えたり、シナリオを書いたりするのではない。》
なんて奴なんだ。天使は人を救うものではないのか。

「じゃあどうやって作ったんですか？」

《その前にほんの少しだけ、“空間”についての説明をさせてくれ。君は、空間はどこまでも広がっていて、端のないものだと思うているだろ？それは正しい。空間はどこまでも広がり続けるから、端などはないんだ。しかし、空間の中には端は無いが、空間の端は存在する。いや、ほかの空間との境界線と言ったほうが正確だね。空間というのは、無数に存在するんだ。君の居た世界、僕の居る天界、そして君が今いるゲーム内世界は、すべて別の空間に存在するんだ。空間同士は基本的に互いに干渉することはできない。

しかし、僕ら天界に住むものが持つ2つの能力を使えば干渉することが出来る。

1つ目“一方的に人間界にのみ干渉できる”これにより、君みたいな可哀想な人間に救いの手を差し伸べられる。

2つ目“新たな空間を生み出せる”これを使って全く新しい世界を生み出すんだ。しかも、自分が生み出した世界には干渉することができる。

その創造した世界に人間界から人を転送するんだ。自らが創造した町・山・海・大地・空・建造物・・・人だって居る。もちろん、君の居た世界には存在しえない、空想上の人間だけだね。》

どうやら今回天使に連れてこられた人間が、自分のようだ。なんて不運なんだ。自分のことを恨めしく思ってしまう。

ラファエルは説明を続ける。

《人間が居るってことは、もちろん人間以外の生き物も居るよ。犬・鳥・蝶・蛙・虎などといった動物だっている。まあ、君の見たことのない・・・いや、見ることもなんてできようも無かった生物だっていっぱい居るがね。》

― 見ることでできない生物・・・もしや！

「もしかして、“モンスター”って奴ですか？」

《そう、大正解！！モンスターだって一杯その世界に住んでるからね。せいぜい気をつけることだよ。》

やはり……。今まで人間界のゲーム内で倒してきた“モンスター”が住んでいるとは……。しかし、どうすればいいのだ？人間とすらともに戦えない弱くて非力な自分が、怪物なんかに襲われてしまったら……。

「もしもモンスターに襲われてしまったら、どうすればいいんです？まさか戦えって言うんですか？」

《当たり前じゃないか。君のやっていたRPGやアクションゲームでは、主人公はモンスターと戦うのが宿命ってものだろ？僕が造ったゲームだって同じ。》

少し間を置いたあと、天使はこう言った。

《そしてこのゲームの主人公は……。君なんだよ、エリク君！》
しかし自分には、そんな力は無い。

「でも、自分にはそんな力……。」

《心配しなくていいよ。もちろん主人公は武器を使うんだ。もちろん防具だって着ける。》

「武器……。ですか？でもそんなもの見当たらないですよ……。」

《ちよつと待つて。今転送してあげるよ。》
すると彼を、ものすごい高音と眩い光が襲った。

「うわああああ！やめてくださいよっ！」

思わず耳をふさぎ、光に背を向けてしまう。

《ごめんごめん！僕もまだまだ天使のなかでは未熟でね、転送術を使うと光とか音とか熱とかいろいろ出ちゃうみたいなんだ。》

いろいろ……。ならなぜそんな物騒な術を使うんだ。まだ耳がギンギンする。

「そんな術なら使わないでくださいよ！」

《転送術ってけっこう疲れるんだよね。僕も使いたくは無いんだけど、天界の昔からの掟で、人間界に行くことはできないんだ。何が目的なんだろう……。まあ、それにしても、さっきの君の怯え様

は傑作だったね。本当にこれから主人公やっていけるのかな。》
自分がエリクを連れてきたにも関わらず、ラファエルは嘆いた。

「あなたが連れてきたんじゃないですか！なんで僕なんかを・・・？」

《君はゲームが大好きだったみたいだからね。君なら絶対にこのゲームを起動してくれると思ったんだ。実はあの封筒を送ったのは君で10人目。ほかの9人は誰一人として起動してくれなかったよ。折角丹精込めて造った世界だからね。早く人間に体験して欲しかったんだ。》

常識的に考えて、見知らぬ人物から送られてきたゲームをすんなり起動などはないだろう。

しかも全く情報の無い謎のゲームならば。

《それに・・・》

今までとは違い、少し低く落ち着いた、どこか悲しそうな声で続けた。

《君を救いたかったんだ・・・天使として。》

ラファエルが急に、人を救うなどといういかにも天使っぽい言葉を口にして、少なからずエリクは戸惑った。

「救う・・・ですか？」

《そう。君の心はずいぶんと暗くなっていたようだ。可愛いそんな人間を救うのが天使の役目だからね。》

確かにエリクの心はとても暗くなっていた。

《こんな形での救済となってしまうが、分かってくれるかな？》

あの嫌な現実世界からたすけてくれたのか。そう考えればこの状態は悪くないのかもしれない。

むしろ感謝するべきなのだろうか。

「まあ、僕はあんな世界戻りたく無いです。主人公になるのは、ちよつと面白そうですし、頑張ってみます！」

《よし！これで君と僕の物語がやっと始まるんだね！》

ラファエルは嬉しそうに言った。

「あの・・・、ところで、武器と防具が転送されてこないんですが。」
さつきから何分もたっているはずだが、まだ何も見当たらない。
《まあまあ、ちょっと待っててよ。もうすぐ届くからね。》
自分の転送が失敗しているはずなのだが、全くラファエルは動じていない。

30秒ほど経つと、ラファエルがいきなり大きな声で叫んだ。

《危なーーーーーーーーーーーーーーーーい!!!!!!!!!!!!!!》

「え!？」

ふいに上を見上げると、遠くの空から何か分からない物体がいくつ
か、こちらに向かって高速で向かっている。

反射的に後ろに下がり、なんとか間一髪のところかわす。少し遅
れたら危つく直撃するところだった。あの勢いなら重症ではすまな
かっただろう。

どうしてもっと早く教えてくれなかったのだろうか・・・。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4505x/>

Another World

2011年12月1日18時46分発行